千　玄室
国際ロータリー元理事
ロータリー財団元トラスティ
ロータリー日本財団会長
2650地区特別顧問

京都IM 第3組 基調講演にて

丁亥（ひのとゐ）歳の新春を皆様お元気にお迎えのことと存じます。

ロータリー102年目にあたるこの年、ビル・ボイド国際ロータリー会長は“Lead The Way”（率先しよう）をテーマに、「ロータリアンがその伝統的信念に基き一人一人の善行を積み重ね、それによって世界を変革していこう」と呼びかけています。

また、当地区の平井義久ガバナーは、このボイド会長のテーマに従って、これを実践していく為、ロータリアンが周囲の凡ゆる人々との間に“心の絆”を結び、これによってロータリーの理想を達成しようと地区の活動をすすめています。

唐代の詩人・劉廷之の詩に、

「年々歳々花相似」　「歳々年々人不同」　とあります。

この詩は如何にすれば人間の心を一つにできるかという大きな命題を指しています。心ある人は輪廻の中で命をいただいていることを有難く思い、祖先が日本を守り育ててきた実績に対して畏敬の念と感謝する心を持っています。

しかし、他の大勢の人々は「自分だけなら、私が幸せだったら、他人はどうでもよい」と自分のみの我と意地を張り、己の幸せを願うだけなのです。そのため、全体としては下降の一途を辿り、今では他人どころか自分の親や自分の子どもの生命さえ、軽視する誠に憂慮すべき風潮に陥っているのです。

「毒語心経」という仏教の教えの中に、

“宝所在近更進一歩”という話があります。

一人の道案内人が大勢の人々を連れて宝探しにゆくのです。ところが、その宝の在り場所は遠く危険が伴い、なかなか見当たらないので人々は疲れて、不平不満を言い出します。そこで道案内人は一時的な安らぎのため、休憩用の一大化城（夢の中の形のみの城）を作ります。ところが人々はその化城に満足し、もう宝探しをしようなどと思わなくなり、日々の安逸のみをむさぼるようになってしまいました。そこで、道案内人は安逸安楽に流れ、知足安分を忘れている人々の前からその化城を消してしまいました。当然人々はその道案内人を恨み、化城を戻せと迫ります。その時道案内人が人々に向かって教えた語が、「宝所近きに在り　更に一歩を進めよ」という大号令だったのです。

この道案内人とは釈尊であり、宝所とは彼岸、即ち極楽のこと、真の悟りのことであります。その所へ向けて人々を歩ませようとされる釈尊の御力の尊さ、有難さを私はしみじみ感じるのです。

日本の家庭・学校・職場や地域社会から、いたわりの心や忠恕の精神が失われつつあるのが現実です。

しかし、今からでも遅くはありません。醒めた目でしっかりと自己の周辺を見まわして、何処に向かって一歩を進めればよいかをしっかりと確かめるべきではないでしょうか。もう一度感謝と有難うという心を中心にした生活態度から立て直すべきなのです。

ロータリアンは世間の人々の模範となるべき存在です。どうか佳き世界をつくり出すために、一人一人が「率先垂範」してくださることを、新しい年の冒頭にあたり希望いたします。